新田義統功臣録 六

へ13
205
6

自序

南翁之導子姪猶玉人之攻璞玉也
忉瑳徐之貫光不可滅矣往者志貫
一話前編已成屬韓之隨安知不
珍燕石而擲和璧南翁之鬼而
有知其將數我歟乃絶筆焉今茲

東京帝國大學圖書之印
本邦
侍
於
2
6

衆星闇主人從叟曰先生之言誣矣
謙矣然非所以辟責於南翁也夫
拾燕石之過孰與玉石俱捨之罪盡
磨其石以類彼玉綴其玉以增之光
彼鬼如有知將懷璞而踵儿下武夫
典夜光先生何不辨爲無乃倦
操觚之煩欲予拉掌曰多口哉爾如有
毅我者尔代我辭後篇於是乎
出

文化丁卯春歙醪閑士題於獨醒
書屋之小窓下

醉墨真逸錄

篠塚入道石虎

軍前矜勇甚
井庭大驕生

婦女雛紅炮
盤夕壁白粧

小百合尼

井求馬（いのもとめ）

續聲

皓月凄涼韻行雲斷

岩根（いとね）

園綮賽明月揺蕩越

秋風

日薄蛟龍影風靡
島隼文

五十熊（いそくま）

横笛（よこぶえ）

乾坤雙羽

巽宇宙一樊籠

恵仲

箭口補靈感得奇聞 新田義統功臣錄第二編目錄

○卷之一

第十一編
僥太舟中接春詞話
莊輔水亭漏蜜戮話

第十二編
頑婦溺愛亡其身話
貞夫致忠救主家話

○卷之二

第十三編
ごゝ士不図殺讐敵話
一ろけの計避難遺忠臣話

第十四編
惠仲深智得民心話
禪可多欲失一家話

○卷之三

第十五編
言得奸吏受奉爵話
懸意原夫純恩愛話

第十六編　石虎説法摧梵情話　群蛙作鬪激義心話

○巻之四

第十七編　挿松誘母暴師父話　求馬援妻投賊婦話

第十八編　基氏励列候防衰話　竹沢餅美人嚬嚬話

○巻之五

第十九編　奪得一指亡両籠話　拒禦孤僧闘三軍話

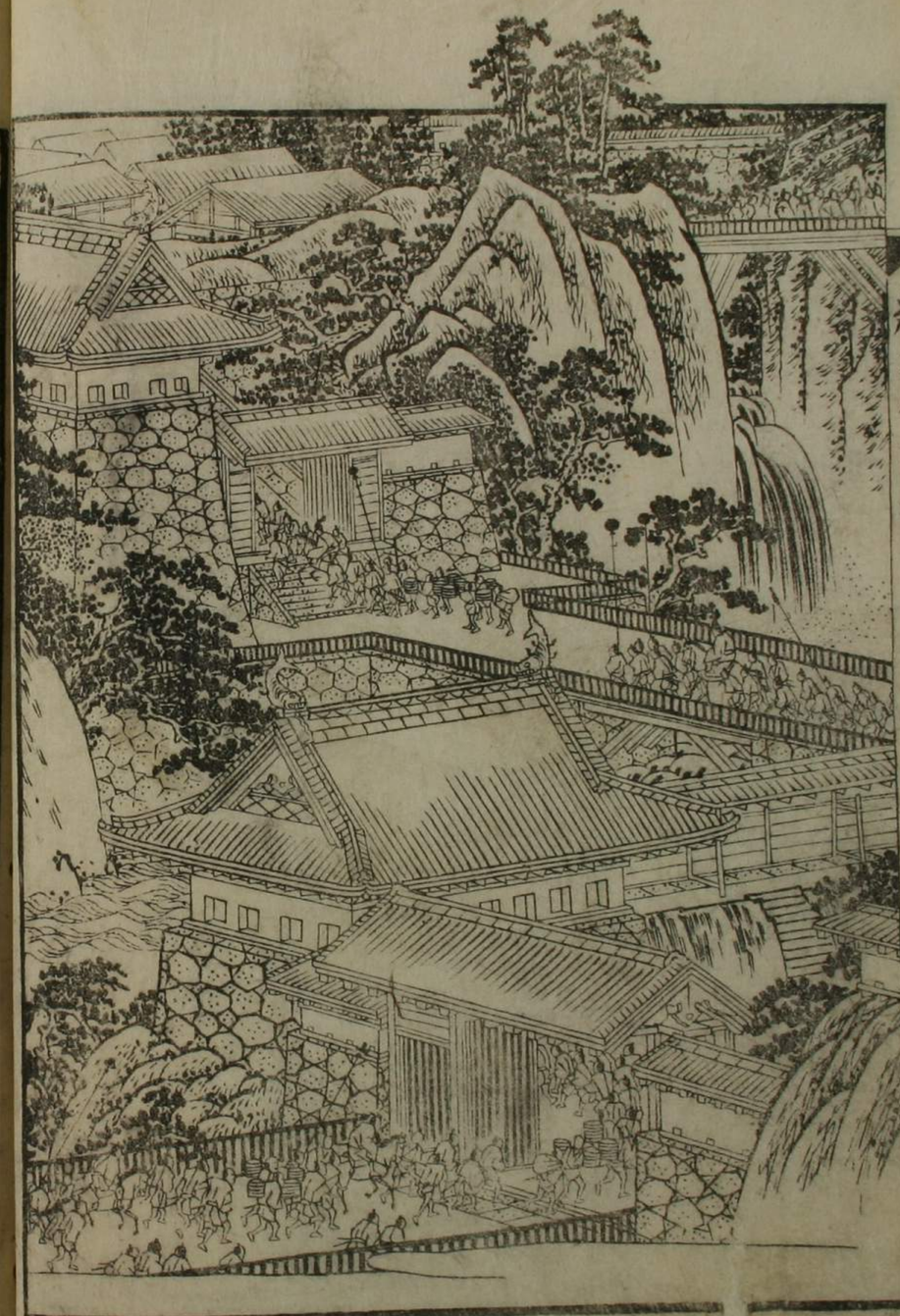
第二十編　討讐敵祭先公神話　辞富貴辱不老仙話

以上　後編　五巻

僥太刑中接春詞話
荘輔水亭漏密議話

却説且鎌倉よりあるくい不思儀の流言およりて一個の喧噪〳〵紀事いとを生ずれり。頃ハ南朝正平十四年の春。誰いふとなく。近年総国ハ新田の餘類躯居〳〵。漸く奮ひ舊好の仲を社黨既み勢ひを得く。持よ鎌倉を襲ん。とそや武蔵野ハ布営〳〵れ。不日ハ此所ハ責来ぬべしなど。言口順し。鎌倉中の人民老ゆるを助け。幼なきを擁。或ハ貨賊を負任など〳〵。東西ハ奔走ス。ハ光景ハ鬼の沸湯ごとくなり。喧噪うりける事なりたかくなりけるハ官領基氏公大ハ嗤的うせたり。俄ハ近臣のうちハ物馴さるものを撰こまひ。それを斥候と。武蔵野ハ

鎌倉評定の圖



遺く。甚虚實を窺ひめたるかあるべく流言ければ布陣さえ敵いさふなり。些の怪しみたる事もなりはれば猛馳飯くるみの狀を報ずみそ。上下にじめて空言なりと知り得るに。しも聒噪うるる鎌倉も束時ふ静まるふ板屋をたるふ村雨の。過ゆく後のごくみてを寂然ふとそなれてけり。然るふ基氏公這回の一件を熟くるひ惟るふ近き一時の人妖ともおもはれず。恐るるふ白王天生兆を示しまふあるんよ。はさてやあるべくと俄ふ竹澤監物を。上総國の知縣とし。芳賀兵衛入道禅可を下総の國知縣としまひ。新田の縁属をたふなり。南朝ふ由緒あれ徒を搜索捉るべきの旨を。厳ふ命まるふそ二人謹み畏るるゆて任国へそ赴きぬ。此二人のうち芳賀入道禅可ハ前年將軍家の勘氣を蒙り故郷下毛國ふ蟄居るるが。去年の春ゆゆく恩免を得る。京師より

はるが。鎌倉殿ふ召ふたの台命ふ因りて。去年より基氏公ふ仕事たりしふ生質奸智ふ長たれ徒あれハ執事長官ふ拨臀捧屁遂ふ上のるるを得。今回不圖重き任を稟ふ花也開了。奈何ふも。て功ふ速ゆ。竹澤が上ふ立るるふ想ひ任國下總ふ届著と。直ふ縣ごふ榜文を張掛げ。行移るるふ新田の余属。且ハ南朝ふ由緒ある徒を訴出れ門員幾許の賞金を下ふ。若蔽隠徒後日他より發覚ふ。其罪三族ふ及ぶ。と甚厳ふ。此事就地國中ふ普く。欲ある徒ふ賞金を想ひ。身ふ顧る曹ハ血属隣伍ふ。あり。て連坐ふ。且ハ恐ふ。已れを捉へ。と。閲ひ。て。後ふ國の人心ふ。為ふ只猛ふ。こゆりふ温和るるぬ。方見れ。不在詰下再説。莊輔が女児玉琴ハ德壽丸の病ふよりて容貌の憂らせるひるふ厭ひ父親の命を乖阻。貞児ハ

嫁を代らしめたれい荘輔深くこれを悪み一室なる裡ふ閉籠おとづれを外ふ出ず食を止ちて只是籠中の鳥のごとく。暫時いろひ忍ぶといどもを原来故湯浮氣あーあるとなげくこと今てせ〻ゑ〻ゑ鬱氣停滞す。遂ふ病さとかりけり。母はこれを聞くと愁ひ彼是ふ名さ〻ふ醫師を乞迎へ多方ふ治療なすとせども。そのしるしを験はれ熟〻思量ふ此病は素我夫一徹の恚奴ありよ乗じ強ふ戒わるひたれいこと斯へなりつれ若此上戒なくば自らこと汚慰むることあらじ。我分かれ病を怠ることあと一日便よりて折ふ。荘輔ふ對ひいとりなる王琴が病今程は甚重ふなりぬ〻〻過るべ食もまとく危ふくおぼゆ。聞あ〻〻病は原氣血の鬱滞ふよりて発動とうふ〻〻べ邪〻は世く戒を寛めて心を慰はしめ〻然とは醫藥をかけ〻〻病自〻おとこ〻ける。

老爺の底訓も素愚を懲らし善を勧めなほん慈愛心より做ふ。ひたる術なり斯節を過ーあひるべ常言のごく牛の角なる直くせ〻ゑ〻欲まく〻牛を殺の譬ふ均らりめべと右説なるべ〻ふぞ。荘輔悪〻そおりべども。さてこそ恩愛の羈ふ〻せあく。病重ふなりといへ〻ふ〻ふ心も焼〻て。遂ふ渾家が意ふ〻ちはるせ〻戒をそ免やつり。かとるべ荘春は正ふ連日れ雨の一時ふ晴く。白日青天を看れのおりひなる做。病のふ〻はあるおりく〻は近き邊ふ出花を摘月を愛く只顧遊観ーのこそさみめふ〻ふぞ。甚重ふなりし病もいとよみーふ怠りく今はまとく常ふ復もべうかりつり。此時ーも暁夏初旬の天なれい炎熱人を蒸夜ふなれども暑さ堪がたくしほどふ一日の霊れ間ふ王琴一個の不羅とこ〻ふ〻ふる舸ふ上前栽の沼池ふ浮び〻〻涼風を索者り原来此池ハ名也

あふ刀根川の流を引入られ。平日ハ水深く。吹風甚冷やかなり〳〵羅綺を融し。肌を穿ちられば猛然煩暑の苦〳〵を忘れ心も涼やかなれば術なし。天地の造化はけ[illegible]。おのゝ時きりがはなる蛍の烏〳〵ハ群飛あそびハ宴の夜の眺やゝ。一盞茶時看貪ありけるゝ。こゝの散人も本意なし。みざやこれを投ぜ〳〵たゞ[illegible]ハ掉を揺し。其処の岸此所の汀と蛍火の龍ふほゞ〳〵ハ不図も前栽を離れ通の下流ハ出るり。此時も當國の知縣芳賀入道の男兒僥太を両三個の従僕を引〳〵這流ハ舟ハ浮め川猟してありけるが。只今玉琴が舟と間近往遭時ときなれ。川風の吹ハ[illegible]れゝ。玉琴の空[illegible]のそと惠るゝ。僥太異〳〵ハ[illegible]ハ着〳〵ハ月影のさやけかるねハ鮮ハ着へるねとも舟中ハ二人れ女子ありけれ〳〵怪〳〵瞳をさゝめて着一着〳〵ハ年紀二八ばかりの美貌女兒と了鬢髪ハ[illegible]清らかなれ小女子と両人蛍火を捉へ[illegible]ハ[illegible]ハ貝闕の龍女が波上浮ひて戯遊かく怪しむ[illegible]ハ原来好色の僥太猛然春心發動〳〵魂魄飛天外舟を進めて云ハ[illegible]玉琴ハかゝる人のありて我を着よとて露ハ[illegible]舟より何とゝ[illegible]人足の踏ハを失ひ就地水中ハ落入りぬ[illegible]ハ僥太慌忙臂ハのべてこれを惹止めおのれが舟ハ助け上せ死損活様ハ優恤ハ[illegible]ハ玉琴悒然〳〵ハ心も中〳〵ハ[illegible]ハ深閨ハのみあ[illegible]身なれて今ハ[illegible]ハ及びてハ只恐ハ羞ら[illegible]言も得いハ[illegible]ハ礼を陣て辞去ハ[illegible]ハ僥太訣を拄へ〳〵ハ[illegible]ハ一樹の影一河の流を汲ハ運多少の因縁〳〵ハ[illegible]ハ大姐ハ今この流ハ[illegible]ハ酒家自〳〵

浪華 柳星閣

掻ひやるにせよ。その恙なきを得られしば是一凡ならぬ深き縁にやと想ひ
しくれにるゞて難面ハまりまくるぞ。そも大姐ハ何等の人し令愛に候し
まちまや我ハ是當國の知縣芳賀入道の男児に僥太と叫做的ありぞ
そや言葉のうちに淫ある念をて挑ミきすれハ。玉琴ハ知縣の子といへど
うち呪的。はじめて僥太が容貌を看るに年二十にハ足らぬとおぼしく。
眼秀顔色皎くして清らかなる好男児なれバ好色なる玉琴心裡におもふ
やう此郎かく醜くからぬさへあるに。當國の知縣の子といへバさこそ家
も豊饒なるらんに若彼が渾家となり得ば中々に。父母の家にあらんよりハ
還に樂しからめと嬉しくて恥ぢらふもうち忘れてゆかりける。奴家ハ此
邑の長荘浦なるものゝ女児なるが。玉琴となんいふ。今霄後園の池に舟を浮
めてさまよひしに。不圖此處へ流れ出て溺れて死ぬべかりしを郎君の

仁慈の御心によりて蘇生ることを得たり。此恩何をもて謝し奉らん。よしや仁
巾櫛箕帚の勞をとりて高恩に報ひまゐらせんと想へども。いかにせん郎君
ハ貴人にはしまして。奴家ハ賤しき身にしあれバ。甘ハ做がたき由なきことを祈めり
とうちかこちぬれバ。僥太完爾として大姐其心にしあらバ。僥に貴賤を論ぜ
ざるべき。小人が如きを厭ひなくバ。不日に氷人をもて親迎すへし。ふせんに此
とも肯ひ給ふべしや。玉琴いよ／＼郎君の赤心實なるをしりて嬉しくかたじけなく辭を
かへさんと。然はあれど懼らくハ一時戯れにやとうたがひて。賤き身の
かくも賤兒の言をし事をして生涯を誤りやせんと。すゝめるに僥太
いよ／＼心を蕩されて。大姐いかなれバ他人にたゞしく深く疑ひ給ふぞ。我
胸中の切なるハ皇天も照覧ましませ。いかで繾綣の言を述んと。互に盟言を交
はし已に既に好媾しけるが及ばんとすれバ折から水上より一艘の小舸追来て

適く漕来るを間近寄ふとつくづく猛一個の婦人頭生高ゆかる
声にて云ふは〜左なの玉琴よいふ〜〜〜〜此地に来〜〜〜若
老爺の聞うせるひるが又も驚時のごとく戒を做〜〜〜〜飯
ふ人と是非の縁故をも問ふも慌忙く玉琴ごまをとりく〜已ぶ
舟ふ移し上従添の丁髪をも倡ふ〜ち上吃り罵ひさまにとく〜漕
去りけり。僥太八の既ふ七八分を做もく〜嬉〜〜想ふ如此よおとび
めれば只是掌中の璧ふ奪られくる〜想ひを做只顧悔ひ惜こく跡を
慕こて行んとあひ〜とさすがふ従僕のあ人も恥〜く且う今背彼
所ふ行も由るく〜べ心なく〜ずも舩を求ら〜空〜〜家路ふ飯とり
さて今ふ〜ふ玉琴を惹連飯っ〜〜れ婦人い是甚人ぞ〜いふ則玉琴ご
毋なりけり。背ふ玉琴前栽の池ふ舸を浮めはじめ〜初更さる迄

閨房ふ飯らざれど甚怪〜〜て後園を捜ふ〜〜〜〜只水面の枝
にあ〜を着〜ければ必みる生〜る〜〜んと自う〜〜一艘の舟ふとり乗ゆを
をもとみ追来り〜〜。伴ひ飯りしなり。間話体題僥太ハ家ふ飯賦ふ聽
ふにんとすれふ玉琴ご容貌眼ふ遮り。夢うとそばうり香ハたるふ
衣まふ移ばば只依〜意こと〜〜。只顧おりひを焦〜あふ宴の夜れ
明ゆ〜〜〜や樓雲の左側ふなりめ見ぶと〜起出〜〜〜〜萬の事を
不管。彼所の天の〜〜明ゆり。湯〜〜〜〜として酔れ〜の如く且白痴のごと
惘然としてあり〜〜〜甚も酒の〜〜〜〜晩時ふ〜〜〜〜

なれども恰一城郭の如くなり。忍び入る者もなく暫時躊躇てゐる
まゝ心中に想らく竪陣名城くれども忍び入るに術あるものをさひて
やがてかくれ裡に忍び入るぬとこゝやあるべきと塹を巡り後門の方に
窺ふに。こゝに閘の傍に数株の柳樹生茂りこれぞ一株の柳れ
長き條柵の外に垂るゝを看て。こゝ一ツ喜び今此柵よりて忍び入り彼
人に逢事を図がゝ青柳の糸あり。我身ひとくに月下の翁が結べる赤
糸なりと獨ごちくて此條を攀柵を越て裡に入得たり。此夜は
是晩夏十日のことなれば月は天心にありて晴光明らかなれば
ひそかに此前栽の分野を窺ひ看るに假山剰水の風色は天工をも欺くべ
かりける。珠玉池中の芰荷爛漫と咲乱る花芳ばしく鼻を突り
一段ふ。ろうに此風景に貪看。暫時茫然として眺るに只看れば。對岸に添て一

軒の水亭あり昔廉平無裡に人の説話に玉琴の紅
閨ありしかと想ひ出るに。いつかも忍びしり其虚實を知らんとこゝに水
深く渡るに橋なく。一盞茶の時たゝるに原来水心を得れ
ば。いつまで斯くあるも由なし。心を水に流んとて忽ち衣服を脱て首に
頂き。それより上に種くの藻を掻かきつかなに掩ひ隠し。蜜に乗じて流り水亭
の下に忍びまり。緑れ株樹に寄すがり裏の模様を窺ひぬ抑この水亭と
いふは。荘浦一串の人くを會へ密議を計るべき爲にこしらへ置るなれば
もも此時荘浦兵司を招き相計るに此度街道に泉源をこゝに
渾我門の客のうち。事を寛せざれば心腑を嚙の悔あるべし
よりてこゝ徳寿丸を飯らしめ。九郎をはじめ謀計成定あ不意に
發く禪可を責討に心勝利成得るに至らん然後大議を計るに伊の難

不圖

こゝろあるべしと高議するを僥太水中ゝ潛ミ居て詳ゝ聞ゝ大ゝ驚
て且喜ゝ酒家王琴ゞ赤心を知ゝと此処ゝ来て図らずゝ此曹ゝ密議
を聞ゝ是天翁我ゝ大功を降しゝるゝ歟。ゝ〻父ゝ告
今宵のうちゝ此曹ゝ擒ゝ。爾して后王琴ゝ得んゝ何の妨ゝあゝ
獨嬉しみ忍ちゝを忍出。敵路をたゝ飯りけり。畢竟僥太甚ゝ
を做下回ゝ分解を聽

頑婦溺愛亡其身話
負夫致忠救主家話

且説も莊輔ゝ兵司ゝ密議を約し相別て后ゝ燈下ゝあつて這回
の討議是非奈何あゝしゝと思量し四更の左側ゝ至れども尚聽らど
てあり けるゝ忽然ゝゝ対の方大ゝ騒鬧くゆゝ甚怪ゝゝ走り来

類ゝ多勢の収兵炬火晃星のゝ燈しは是家の四面を稲麻竹圍
異口同音ゝ呼ゝ此ゝのゝ莊輔ゝて南朝ゝ由緒あゝゝのゝ
ゝゝ隱謀を企けるよ。替ゝその因へあゝゝよりて速ゝ召捕べゝ知縣
の命を稟走對向たりゝ縛ゝ受ゝゝ叫びり莊輔ゝ捕て大
ゝ嘸的ゝ何等の人ゝ我一大事を知りて。出首ゝ来るゝ。我ゝ事の后
るんべ没理會今ゝ支如此るれゝ空ゝゝを束ゝ擒ゝりるんゝ運
を天ゝ任せゝ戰人ゝ不如ゝ既ゝ斬ゝ出んゝ考ゝ又想ゝゝ。今我
一身をゝゝ此多勢ゝ戰ひ若過失あゝゝ積年の宿志ゝ空ゝゝるのゝ
ゝ戸のゝゝ恥辱を受先祖の名を下んも口惜れゝ一ゝ此処を脱ゝ生
嘉九ゝ達ゝ兎も角ゝ做ゝべゝのゝ。暴ゝ奴僕の容紙ゝ打扮。
後門のゝゝ逃んゝゝ。ゝゝ騒乱ゝるゝゝ恩愛の羈ゝ。

妻子のこと聞べく。相伴へと彼所此処を捜索ふ。甚處へ往こん累きぶ
着べきぶふ。敵もや近ひき迫りなれば是成雲ふいと函ふ。單身後園
の池よりあるふ舸よりとあり。脱出こんとすれふ恰好二女横笛収
兵のうち入るふ逐る恐れ。前刻ふ此舟ふ躲と思ひ居るふそ。荘浦これを
又且發ること且喜ひまづ一人を助け得ようと。直ふ闌干ふ舟を乗せ
く走ふんとするふ。此處ふも多くの収兵會集たれども。この時月没し天
曇く咫尺も弗辨。是や白玉天の我を助けるるあるめと喜蘆の生
茂な漕めけく。甚所ともあく脱れり。今此處ふ對向る隊將ふ是誰
なりと想ふふ則芳賀入道の男兒僥太なり。前刻水亭ふ〳〵蜜の
家ふ飯り父の入道ふ告ふ此處へ寄るる門際ふ至るやいなや令
沈下し櫛雄りく門扉を打毀せる勢の収兵一齊ふ突入老少男女
の差別なく柔しこれを拉く些あるも阻こ支ふる徒ば大勢取籠
て斬殺しふ忽ち後堂ふ突入只顧荘浦玉琴を搦へんと隈くを捜せ
ども其影をも着ざれば隊將も士卒もほとく索かねてぞ引
あり。此時玉琴こと前刻ふ収兵の乱入ふ驚きまづ母とまを捨へ
走りしふ敵既ふ荘院の裡ふ滿ちたれば脱ぐこと途ふ傍よりあり
薪を積る蜀廬ふ躲と且らく外の方の動静をぞ窺ひ居ぬ。斯ふ折
かふ収兵の仰あるふ索かるこの所まづ捜しふ積疊薪のそ
と音するふこと怪しとく裡ふ入へ柴なとり除こけふ玉琴母子
抱合へありふぞ。ふ口ふ口ふ口ふ口ふ小相公の宜へれ玉琴
あるらんふ。ふ捉へ恩賞よあづれと。ほとり足ぐ〳〵牽立ゆうんと
もをを。母親を雄〳〵くもあれば遮拉くあるまくを一人の収兵

と足を挙て撲地と蹴るに。其足鳩尾の邊に中りければ何ぞ暫時
もたまるべき。聲地一声呼と叫びしが。そのまゝ仆て死てけり。嗚呼這主廝
が妻其性質頑なれば。まつしく子を教るの道をしらず。玉琴をして擅
に身の行状を爲さしめたるが故に。此禍を惹出し遂には其身を亡して
に及べりぬ。斯て収兵の徒は玉琴を牽て僥太が面前に居ゑつゝくの
よしを告るに。僥太こよなう喜びてあれど。提ざるそのみならで乃賞
金をあたへ。玉琴をば一張の轎子に乗せて先に衙府へ送りはじめ尚閭家
を捜さすに。はちふに人はあらで只銭許の錢財を捜し出しぬ。僥太是等
の物を取收め后家に火を放ちけるが。折ふし風烈しくはしも荘麗を
つくしたる居室塵ばかりも残らず。只一時の烟となりて失めることぞ方見
かりける事なりけれ。且説まさに這裡にて兵司五十熊が人も同時に

収兵の對向けるが。忠怪したる事こそありけれ。収兵の們先五十熊が家
に對向て豫て此五十熊を荒そのなりと思へしかど。さらぞ言十苔戦
のあらぬとと想ひつゝ喇語阻戦る事は扨置ぬ。走るところ人もせで一家
手を束ねて縛めらるゝにぞ。収兵の曹大に勇を做直ちに兵司が家
に走り對向門戸を毀ち乱入てにいろなれる事なや。举家熟く寝ねて
睡了醒ざれば。只是死したる人を縛むれが如し。これ何ぞ容易擒得
意氣十分なくて牽飯りぬ。此時しも横雲のたなびく頃なれば。まだほのぐらきに
収兵の曹廳前に出来て祢と告げければ禪可立出て其縛めたれ
たるものを眺て眷るにこよなう人の容貌みな似るべくもなくて苔むしたる
古き石牌あるは或は朽たる木の折などいへる類を厳に縛め甚威事げなる
に居たり。禪可あまりに呆て暫し言葉もなくてありけるが。聲地大に叱て

いふ。そは是人間ふ非ざるふ。何の鳥乱をう做ぞ。想ふふ汝們渾白痴ふ成
故ふ狐狸ふ騙らるれく。如斯不吳をうり。既ふ我目前ふ来りしも尚
不収放ふやと。いさゝか〳〵云徴ぜば。収兵の們ぞ。留意牽ふるふ然い
ものを着るふ因今まく正〳〵人ぞと想ひけるふ悉〳〵沼革果〳〵古た
木石とるわりまるふぞ。渾唆然と〳〵喨的愧らひ甚恧然して恐れ
み居ぬ。斯る處へ僥太と荘浦一家の男女幾許人をう捉く来く廳前ふ
牽平居ふりしふ小人老爺の命を稟て彼所ふ對向〳〵ふ荘浦ぐゝ
も逃去めれば。これをば漏〳〵るとでも一家の男女あるのかぐり。或ハ郷ぬ又ハ
斬害〳〵つ后家ふて火を放ち。今かぐりの人を捉く来れりと。詳ふ
説話るふ禪可喜ぐれといくども是も又前のごく〳〵あるやく〳〵
牽来〳〵ものを点検着るふ渾是さそこの人なれハ業躍て嬉し。

僥太ふ功を賞〳〵。兵司ふ許へひうい〳〵し徒を指さしあく云彼曹白
痴ふるふ故狐狸ふ騙らるれののだよを不吳をとれり此ふ鎌倉ふ
へなべ我ぐゝも物笑ひとなりく。君の恢氣色奈何あく人も計り知り色
カ〳〵よりて賢児我爲ふ勞を不厭再び彼所ふ赴き兵司五十熊ぐの
黨を捉人来るへとしば僥太畏こ心ふ得て。さく〳〵兵卒を率く出
去りぬ。今此兵司五十熊ふを捉へんとせ〳〵們の怪異ふ遭へる一件ハ年比
惠仲ぐ尊ぶみ信じたる靈狐の危急ふ救ひ給ふふ神変の覆庇し
ものとぞ。且説も兵司ハ宵ふ荘浦と蜜議を約し家ふ飯りく既ふ曙
ふ近く四更過る頃ふ〳〵外の方暴ふ雨〳〵く荘浦ぐ家池異の災あり
ぬ驚こ起出走行く甚動静を窺ふ。大勢の収兵荘浦ぐ邸宅ふ
稲麻竹圍たる所着さて八我們の蜜ふの幾賞けるをし曉得て荘浦ぐ

ものゝ乱賊しく。助け出さんとする時ふ収岳の仲口〳〵ふ今ハ〳〵や是まで
なり。惜むべくハ荘浦を討滅しめるまゝ引退さるゝ事
あれハ呼危哉荘浦の主ハとく蹴を脱さく悉ならんふ其ものをも知べ
這敵中ふ切入らんとみてぞ。それ草を打くく蛇を驚うとする〳〵ふと獨
こらて猫ち身を持し。我直ふ飯ア人〳〵ふ對ひ。志ぶ〳〵の縁故ハ云はの〳〵
負児をそゞめハ即ち渾家と己が女児とを誘ひ。取えのもとりこゝをして。
五十餘ばかふ至りけるとふ。五十餘もそや隠謀の發覺めり知り。毋を助
けく走らんとせしふ。岳司がりと聞心〳〵目今毋と倶ふ往んとこゝを新處
なりけるとふ。大ふ雀躍打連く。上毛囲ふ趣き徳壽丸ふ見へ。危も角も
做へしと應ふ打立んとす。爰ふ恵仲が家ふ久〳〵住へきりし奴僕。負七ハ
今茲既ふ七十ふ餘れるゝ。近日脚疝の病ふよりて。行歩もそろ〳〵〳〵から

ざるに五十餘年〳〵ふ忍びぞ倶ふ誘んと勧め促と負七ハ〳〵ふ系弓ぶして
ふ拙翁年既ふ七十ふ過れば。旅命幾年をう存りぬるぞとそのく呻吟
の病ふ〳〵ふ且夕をもそうを知るべ〳〵ふ臆包的ふ助けるんとして大ふ
を誤りまある。拙翁とゝふ有りてぬ行ある憂ふ遭ふ。いさゝか怨むき
夏ふ一只敵の近ぶ〳〵ふ一歩も不ア落のびるふとも老が身の故
ありと。少しも動〳〵ぶ光景ふ〳〵ふ。毛収岳近づき寄る光景あれハ
人〳〵今ハ没理會ふ〳〵ふ。負七を引ふ後門の方より脱出さて。
負七ハ人〳〵の出さ玄着遂甚ふ〳〵ふ且ら〳〵首を垂〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ獨
微笑ふ〳〵俄ふ衣服を脱ふ。それを首上ふ頂ふ赤裸ふ〳〵ふ門邊ふ出てふ〳〵ば
しあ〳〵ふ西ふ東ふ往つ戻つふ苦しゞる声〳〵あるふ〳〵ふ〳〵の
水やとい常ふ〳〵ふ何ふ〳〵ふ斯澤〳〵水の流へふ〳〵ふ操返〳〵

えうこりり此時も僥太郎勢の士卒こぞりとみ出たるに
家の裡寂寥そして一個の人影をも看ざれば甚之返今此地ふを見て此
貞七が行狀を看絶倒笑ひこゝに狐狸ふ騙らるされたる人なめり。あゝ
笑止や。隊將も士卒も一盞茶ふ貪着てありしるゆゑ僥太偶こゝ
けた俄ふ賢げなる顏〳〵徒卒を戒〳〵云汝ふさぐりおかしこゝ
ひそ前部ふ對向〳〵我れ彼れ〳〵白痴ものこそ騙らるさて。
こゝ恥辱をば忘れ只今そのうつ光景を看るふ前部
の狐狸いそぐ此地を去りであるべきよ前車後車の戒を想ひ出平聽
誤るせそ彼奴何等の奴ぞ捉めべと命令せば徒卒もげも
と曉り眉ふ唾〳〵貞七を捉へこれを門柱ふ繫ぐ尚家裡ふ
入隈なく搜索ふ是も又兵司が家と均〳〵ければ大ふ齒決憤り。

貞七を責〳〵五十熊おゝ去向を問へば。あゝぬ戲言をあゝりぬふ。僥太
はもも〳〵燥集其奴いそぐ狐の去らゝあらんよ強く鞭韃なるべ赤心
なるべ〳〵太ゆゝ敷鞭をりて連下ふ擊めるふゝ。悼哉貞七老體ある
さへふ此ほどの病ふ神氣衰へめれば奈何ぞ斯鞭韃ふ堪ゆべき。呼と一
聲〳〵仆るゝ再び起ることを不能遂ふ黃泉鬼ふ入りぬ。惜
るべ〳〵貞七可憐此翁生質貞實をまり。主家の爲ふ〳〵忠義を
〳〵けるふ奈何あれハ如此非命の死をハ做けるぞ是や仏家ふ所謂
過去生の因緣ふ〳〵彼劉伯道の類ひるゝふや。扨も僥太ハ巴鼻ふもある
べと貞七を擊殺せ〳〵兵司五十熊おゝ去向を索ひべきふ道なく只
是暗夜ふ燈火をうち消〳〵ぬ妙〳〵を窄して安りけ。
不在詮下再說ゝ兵司五十熊ふ不圖禍ふより。四人の婦人を伴ひ。

住慣たる下総國を旅發ち。故郷の雲を脳後よかくりて。客路の露を
面前に望み。上毛國湯香係をさして急ぐ。程なく榛名山の麓を
ぞ徑過りぬ。此時しも德壽丸は紫花真人の教にはなれ。船田太郎を
まろうんと只今此地方に来りて。ふは〜と行遭めるふぞ五ふ怪しと且喜べ
れども。兵司ふの人〜は德壽丸の光景を看て。瘡痕全く愈て。
質の容貌に露ばかりそせねばさいなく喜び嬉こ。其健ふ以りて
を賀し。后前日密事発覚ふ。ふぐ〜のありて此所に来る一五一十にぬ
もなく詳ふ語りぬ。ふ德壽丸は惠仲八郎も。大ふ喚的といぶも
人〜の悪あれを喜び且荘浦一家の事をさとるに負七が忠義のほど
憐こと俱ふ袂を濡し。且らく〜惠仲進こと出る。小御内真人は
土ようり。船田太郎を見まろうんと。此ふ来りて。縁故を細的ふ説話。今宵は

此地方に宿り。熟く商議を決むるとて。宿るべき家を索れふ山高く
谷深く。常ふ烟籠霧鎖る幽陰の地なれば。只一軒の白屋ぞ。
ふく索かひ〜呆然をりかく。只看遥の山中ふ一宇の招提のありけ
少し〜力を得て。露を拂ひ草を踏ぐ其処へ至り看るふ軒崩壁
破れ古寺なれども人の住めるさまふ見えねば。ずぐ叫門をとふ。主と
おぼし。大ふ猛しげる僧のたち出れば。惠仲進こと近づき扶る地ふ礼
を做し。今宵の宿りをたづぬ。彼僧人〜の模様を窺ひ看て云
けれは甚易き事ふ。ぐも看るべき避地の寺なれば泰ふ〜
き飯ぐなり。早ち厭ひ〜なふば。ぐう辞ぐ。惠仲は
をうちぬ。我〜些の食物を貯へおれば此夜更ふ若し〜。只一夜ぬ
だる明させ。上ろさ事丸。主僧云ける〜ようおぼし

いそがせ
五十熊が家来
駕をえらして
主人を走らせ

はやく〳〵せよと誘引く。一室ある処に請じ入あげる器よ木よ
實ものの物を盛り。山茶汲そく〳〵出しめるあぞ。人〳〵喜びくとれを食
尚貯へ持そゝ。下飯あぞ〳〵。誓し労を慰ひさう